

札幌大学総合論叢 第35号 (2013年3月)

## 〈論文〉

## 日中近代文学の発生に対する医学の影響について

劉 金 挙

## 0. はじめに

日本の近代化は、まずオランダ医学をはじめとする西洋医学の導入から始まり、次第に兵学、自然科学と社会科学の分野へと裾野を広げ、殖産興業と富国強兵を実現した。それにも関わらず、「洋学者たちの近代文学に対する最大の貢献は、彼らが近代文学発生の条件をつくり、そして近代文学の生まれる思想的母胎をつくったことにあり」、「狭義の意味での文学に対するこれらの洋学者たちの寄与は必ずしも大であるということとはできない。」<sup>1)</sup> それに対して、欧米とりわけ明治維新に成功した日本に啓示を得た魯迅、郭沫若等の中国の留学生は、もともと西洋医学を専攻していたが、最終的には文学創作に転身し、中国近代文学の先駆けとなり、その流れを推し進めることで、国民の啓蒙に励み、中国の近代化に大いに貢献したのである。つまり、日中の近代化において、西洋に根源を持つ近代医学が大きな働きをしたことは間違いない事実だが、両国の近代文学の発生への貢献度から言えば、雲泥の差があると言っても過言ではなからう。

しかも、1915年の五四運動に至るまでの「中医」（中国における伝統医学の呼称）と、明治維新前年の1867年「医学館」が幕府に接収されるまでの、中国に強く影響された日本の漢方医は、社会において常に揺るがない地位を占めてきた。だが、ここで注意すべきなのは、「道為本、器為末」（鄭観応「盛世危言・凡例」）・「重道軽器」という儒家思想に制御されていた両国では、一時期の例外を除けば、医者 of 社会的地位は低かったということである。しかし、近代に入ってから、西洋の圧力が強まり、亡国の危機を目の前にした日中両国は、漢方医の社会的地位を貶めると同時に、西洋医学の社会的地位を高め、最終的にそれを制度化した。その結果、漢方医を廃止した日本に倣い、中国でも数回に及び、医学界を含む社会全体に大きな影響を与えた「中医廃止」大論争が巻き起こり、最終的には1929年の「中医廃止案」可決に至った。このように、もともと地位が低かった医学は、近代になってから国家が立法して管理するほど重視され、特に中国ではまるで国運の盛衰に

関わる大事業として取り上げられ、崇められるようになった。

この歴史的現象に関して、まとまった研究はないようである。本稿は、時代背景に着目し、亡国の危険から免れ、先進国への仲間入りを果たすため、立遅れの根源と見なされていた中華思想の影響を国家レベルで一日も早く根絶するためにそのシンボルとして否定された中医・漢方医と、先進的だと目された西洋文明を導入するために、その象徴として制度化された西洋医学について分析し、そのメカニズムの解明と同時に、両国の実学思想についての分析を通じて、中日近代文学の発生に与えた近代医学の影響を見ていこうと思う。

## 1. 「国家の医学的意識」から見る医学の社会的地位の変遷

「医卜相、皆方技なり」(「三字経」)、「巫医・楽師・百工の人は、君子之を鄙む」(韓愈「師説」とあるように、長い封建時代、日中両国において、医者への地位は低かった。しかし、封建時代から近代への転換期において、中医・漢方医にとってかわった西洋医学の社会的地位は、それらと較べ大いに向上した。

### 1.1 日本における漢方医・近代医学の社会的地位の変遷

長い歴史の中で、後で詳しく見る中国の影響から「夫医は方技の一にして、諸史には其末に加へ、賤しきものになせり」<sup>12)</sup>とあるように、医学は賤業とされ、身分制度の厳しい江戸時代に至っては、奥医師や御典医以外の民間の医者は、「士農工商」の「工」に当たり、武士にバカにされていた。大きな顔ができる儒者になることを目指して、香川修庵は「儒医一本論」を唱え、医者への地位を高めようとしたこともある。

南蛮医・蘭医・蘭学に関しては諸説がある。例えば、「蘭方外科は、それまでの南蛮流・紅毛流などといわれた外科が腫物治療にとどまったのに対して多分に経験主義であったとはいえ、高度の手術を施すという点で、いちじるしくことなっていた」<sup>13)</sup>との指摘と同様に、杉田玄白も南蛮流・紅毛流の西洋医学とその後の蘭方は、いずれも時代遅れのものだと思っていた。ゆえに「そもそも江戸にてこの学を創業して、腑分けといひ古りしことを新たに解体と訳名し、且つ社中にて誰いふともなく蘭学といへる新名を首唱し、わが東方闔州、自然と通称となるに至たれり。これ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり」<sup>14)</sup>と幾分誇示したように、彼が、その遅れを一挙に挽回すべく起こした行動は『解体新書』の翻訳であった。つまり、彼においては、南蛮流・紅毛流の医学と蘭方、それから蘭方と蘭医との間に一線が画されてしかるべきで、更に蘭医を通じて、オランダから西洋の学術・知識などがもたらされてきたとの認識があった。

西洋医学である蘭医は、治療効果、殊に外科治療において漢方医より物理的・可視的であり、理論・物証とも漢方医学よりいっそう科学的に見える上、アヘン戦争（1840～42）で無残に敗れた清国のことを目にした幕府や各藩の為政者達は、軍備改革の必要性を感じて、蘭学を奨励するようになった。とりわけ天然痘の流行の中で、1847年植林宗建が種痘に初めて成功したことは、西洋医学は伝染病の予防に相当の効果があるということを経験的に明らかにしたし、漢方医に治すことができなかった將軍徳川家定の病気を蘭医が治したことで、幕府全体が蘭医に傾いていった。さらにその後の一連の戦争中、戦傷者の治療に西洋医学が大いに活躍した結果、西洋医学はいよいよ漢方医を凌ぐ勢いとなった。

とは言っても、漢方医と蘭医との社会的地位は一挙に逆転したのではない。『蘭学事始』の出版にあたって、「若し私かにこれを公にせば、万一禁令を犯せしと罪蒙るべきも知られず。この一事のみ甚だ恐怖せしところなり」とあるように、蘭学を志す者への風当たりは厳しく、国家権力の側から何らかの迫害が身に及ぶのではないかと杉田玄白は恐れずにはいられず、「窃かに覚悟を極めて決断せし」<sup>51</sup>。また福沢諭吉も『福翁自伝』において幾分誇張した自分流の表現で幕府時代における洋学者の役割は「雪駄直し」に類するものだと言い、「芸者」扱いされた洋学者の憤懣と苦悩の一端を示した。

蘭医の社会的地位が高くなったのは、明治期の頻繁な戦争と種痘による伝染病予防の有効性が知られたこと、とりわけコレラなどの伝染病に対処するためには、まず民衆に対する衛生思想の普及と国家主導の予防・治療体制の確立が必要であること、それが当時の日本の衛生行政にとってきわめて厳しい試練であること、総じて言えば医術の発展が国民の健康・国家の強盛に関わっているゆえ、医学への国家の関与が必要だということが、政府と社会に広く認識されてからのことである。1880年に成立した日本史上初めての医学研究団体「成医会」は、「本会ヲ設立スルノ目的ハ學術ヲ研究シ以テ其進歩ヲ謀ルノニ有リ蓋シ医術ハ国民ノ疾病ヲ治癒シ且ツ其健康ヲ保護スルモノナレバ医術ノ巧拙ハ国家の盛衰ニ干渉スルコト亦甚大ナリ」ということを主旨に掲げたのも、そのことを裏付けている。

1867年「医学館」が幕府に接収されたことは、蘭医の社会地位が漢方医にとってかわった象徴的な出来事であった。この接収に示されたように、維新に際して日本は東洋医学を切り捨てた。1876年には新たに開業医免許を申請しようとする者は、西洋医学の学科試験に合格しなければならず、漢方医を志す人でもまず西洋医学を学ぶことが必須とされるようになり、その後、医学教育政策への国家行政力の関与が更に強化された。例えば、東京大学の一つ源流（法、文、理）をなした開成学校が、もともと平民向けのイギリス医学制度を導入しようとしたが、急に集権型のドイツ医学制度に変わり、ドイツの軍医学校に似せた制度によって官吏・学者の養成に専念する方向に転換した。その後、医学教育制度は

かりではなく、教育、軍事などの方面でも、日本は全面的にドイツに倣うようになった。

しかし、これで近代医学の地位が一躍今日のように高くなったのではない。西洋医学を日本に導入するにあたって、明治政府が主に軍医を招いたのは、医師＝士という認識を定着させる考えもあって、「当時の為政者たちの洋学者に期待したものは、単なる実用の知識、技術を供給する以上の何ものでもなかったことを示す。否、これは幕末だけではない。明治になっても大久保などの政治家は福沢らの洋学者のことを<芸者>と云っている」<sup>16)</sup>。こんな社会状況のもとで、「医師の塾であるから政治的議論はあまり流行せず、国の開鎖国論をいえば固より開国なれども、甚だしくこれを争う者もな」<sup>17)</sup> だったとあるように、洋学者でさえ、洋学は単なる技術学に留まるべきで、それを越えて政治批判をするが如きことはあってはならぬという意識があった。

## 1.2 中国における中医・近代医学の社会的地位の変遷

元々呪術と一体をなした中医は、春秋時代に大きな発展を遂げたが、長い歴史上皇帝の病気を治療する「太医」以外の民間人の医者地位はとても低かった。殊に漢の武帝の「独尊儒術」(儒術しか貴ばぬ)政策の影響で、五経が知識人の出仕のための必読書目とされ、医術は「小術」だとして、医者地位が一段と低くなったのに続き、科挙試験制度が完備された唐の時代になるとその地位は更に低下し、「凡そ推歩、卜、相、医、巧、皆技なり…故に前聖以て教を為さざるなり」<sup>18)</sup>。「思邈、唐の名進士たりしが、医知るに因り貶められて技流と為る。惜しきかな！」<sup>19)</sup>とあるように、医者地位はかつてないほど低下した。明・清時代になって、医学などは「奇技淫巧」「小道」と貶められ、「医卜星相、往々にして其の術を假りて以て民を惑わす。邪教に非ずと雖も、亦当に時を以て嚴懲すべし」<sup>10)</sup>という江西巡撫裴率度の建白には、さすがの雍正皇帝も頷き、高く評価した。このように社会全体は、医者を蔑視する雰囲気覆われていた。

19世紀になると、宣教師の長き努力により、「教会医学」と呼ばれていた西洋医学は、段々と中国人に認められ、中仏戦争など数々の戦争を通して地位が一段と高まっていった。中でも、清政府の李鴻章は西洋医学の優れた点を認識して、1894年「西洋各国行軍するに、医官は最重要なり…是れ西医学堂を興建し、人材を造就すること実に当務の急と為すなり」<sup>11)</sup>と建白したように、中国近代海軍建設の一環として、1881年宣教師の協力のもとで中国史上初めての官立「北洋医学堂」を建てた。ここで注目すべきなのは、これは医学が国家利益に関わり、国家レベルに認められた象徴的な出来事だったということである。この認識が一連の戦争によって広まる中、1908年光緒皇帝と慈禧皇太后の相次いだ死を受けて、長い封建時代を生き抜いてきた「太医院」の「太医」が罪に問われ、中医が中央政

府における地位を失い、西洋医学によって取って代わられるという歴史的な事件が起こった。さらに1910～11年にかけて、清政府はイギリスで医学博士号をとった伍連徳を起用し、国家行政力をバックにしてハルビンで伝染した肺ペストを撲滅した上、国際ペスト会議を開き、ペスト対策の実施を口実に満州進出の拡大を図るロシア帝国と日本の野心を挫いた。これによって国家レベルの医学意識は確立された。後の北洋軍閥政府と民国時代になると、頻繁な戦乱による負傷者を治療するため、その意識はさらに高まり、民国時代に至って数回にもわたった「中医廃存」論争が起こり、中医は一時禁止されそうになった。

### 1.3 果たして何の病気にも役立たない中医・漢方医か

日中両国において、中医・漢方医はいずれも根絶の危機にさらされた時期があるが、果たして何の病気にも役立たないのだろうか。もちろんそうではない。19世紀に至って既に系統が整った中国医学は、日中両国の国民はもちろん、漢字文化圏全体の人々の健康に絶大な貢献をしたことは言うまでもないことだし、接種予防法としての「療荆犬嚙人方」と「人痘接種術」の発明、ハンセン病隔離病院の建立を初めとする治療法は、いずれも世界医学界の先駆けをなしていた。そのため、政府レベルで蔑視乃至は禁止されてしまったのではあるが、その疑いのない効力で脈々と民間において生き続けてきた。

日本では、幕府によって切り捨てられ、また明治政府によって制度的に排除されたと言えども、民間においては、「古方派」、「後世派」、「折衷派」とが長い間競争しながら協力しあって生存し、相変わらず影響力を発揮していた。そればかりではなく、第二次世界大戦後、医学教育・研究界において漢方医に対する見直しが行われ、昭和42年、「小太郎漢方製薬」生産の葛根湯、当帰芍薬散等が保険適用対象に指定されたことを皮切りに、今日に至るまで150種の処方が適用された。「東洋医学が見直されている。日本では特に保険適用もあり、医学教育の中にも不十分ながら東洋医学が取り入れられてきた。一方、東洋医学そのものには、まだプラセボ効果が払拭できていないところがあり、二重盲検ランダム化比較試験を行う必要がある」<sup>[12]</sup>というのが現状である。

中国では、周知のように「中西医结合療法」が提唱され、今日に至っては、むしろ中医の方が、副作用がないものとして人気が高い。

では、病気の治療、健康の維持に役立つことは変わりのない事実なのに、なぜ中医・漢方医の社会的地位はこれほど豹変し、また西洋医学はこれほど社会的地位が高められたのか。上記の分析から分かるように、近代になって、「医学の政治的地位の規定と、国家的な規模での、医学的意識」、「国家の医学的意識」<sup>[13]</sup>が形成されたことが根本的な原因である。この意識のもとでこそ、医学はシンボル視されるようになったわけである。

## 2. 文明像のシンボルとしてみなされた医学

西洋医学は具体的事物と実証精神を重んじるという西洋の古典科学の精神を最も得たのに対して、漢方医はモノの全体と相互間の関係を重視する中国の伝統文化の精髓を最も得たのである。したがって、諸学科から、中国と西洋の文化的特徴を最も体现できるものを挙げさせるなら、医学は最適なものであろう。<sup>114</sup>

との指摘通り、中華文明のもとで育てられ、儒家・道家思想などに深く影響された中医・漢方医は中華文明そのものと、西洋医学は西洋文明そのものとみなされた。それがために、西洋文明を導入するための下地を築くには、中医・漢方医は根絶されるとともに、西洋医学は制度化されなければならぬ運命を負わなければならなかったわけである。

### 2.1 日本の場合

蘭学を開いたと自称した杉田玄白は、ドイツの『ターヘル・アトナミア』を手に入れ、解剖に立会った際、本の内容と照合したところ、「はじめて観臓し和蘭図に懲して千古の差あるに驚き」<sup>115</sup>、漢方医の聖書と見なされた『神農本草』『傷寒論』『黄帝内经』は「人を欺くの書なり」<sup>116</sup>として攻撃した。

ここで注意すべきなのは、彼らの攻撃は、二つの面において同時展開されたことである。先ず、漢方医を中国文化の中核たる儒学と結びつけて攻撃することである。

従来、「儒の道こそ、其国をみだすのみ」(賀茂真淵『国意考』)、「孔孟ノ論ハ治世ニアハヌ」(海保青陵『稽古談』巻一)と排撃されたことがあるにあったが、全体的には、「孔子の道」である儒学は「国家を治るの道」・「先王の道」・「君子の道」(荻生徂徠『弁道』)、「治国の道なり」(二宮尊徳『二宮翁夜話』)と貴ばれるのが主流であった。しかし、この時代になって、「腐儒庸医は天地の大なるを知らず…支那を以て万国の冠なし」、「腐儒庸医、支那の書に従ひ、その国を以て中土となす。」<sup>117</sup>「腐儒・庸医…支那ノ外ハ皆蛮夷トシテ論ジ及サズ」<sup>118</sup>などがあるように、洋学者は「腐儒」、つまり「儒医」と呼ばれる医者思想の中核をなす儒教に対して攻撃を展開した。こんな社会状況のもとで、中国を「中華、中国、上国などいひて、ひたすら尊むあまりに、かへりて皇国をば、ことさらに東夷などといひなすなるは、いともかしく、大反逆にひとしき罪人なり」(本居宣長『馭戎慨言』)という、従来の中華世界中心論や日本人の中華崇敬や華夷秩序を否定しようとした本居宣長の企図は、ここにおいてようやく現実化されたような感が出た。

そればかりではなく、「地なるものは一大球なる、万国これに配居す。居る所は皆中なり」<sup>119</sup>。「中央ニ不当ノ邦ナシ……天ヨリ之ヲ定ムレバ、赤道線ノ下ノ邦ヲ中央ト云ハン」<sup>120</sup>

とあるように、大地は球体であるから、どこを中心と見てもよいと繰り返した結果、日本を長らく支配した華夷意識・自国中心主義という偏見から解放した上、「大抵仏教ノ至ル所、只くアジアノ内、僅二十分ノ二、儒教ノ及ブ所、十分ノ一ナリ。其余ハ大凡天主教ナル者、諸大洲ニ遍満ス」<sup>121)</sup>と、中国の影響力は小さいと論じたり、「今の清に及んで、国を挙げて鞑靼となれり。康熙、国を興してより百有余年、支那十三省、幾億の民は皆胡服してその約束を受け、いまだかつて一人としてこれを恥づる者あるを聞かず」<sup>122)</sup>と攻撃したりすることを通じて日本人の心にある中国像を矮小化した。

また、それと同時に平等観を訴えて日本の地位を極力高めることにも腐心した。

「何れの国か尊卑なからん。何れの国か礼楽なからん…月日の照らすところ、霜露の下るところは、国あり人あり道あり」。「何れの国か中土となさん。支那もまた東海一隅の小国なり。」<sup>123)</sup>殊に、玄白は医学的立場から「人間と言ふものは上天子より下万民に至るまで男女の外別種なし、」<sup>124)</sup>「療治は同じやうに心得、必ずしも志を二つにすべからず」<sup>124)</sup>と主張してきた。このように、長い間文明国として仰がれてきた中国像を揺らがせ、日本は世界において優れた国であることをアピールし、「世界万国の中で、もっとも優秀な国は、わが天皇の率いる日本国だけである」<sup>125)</sup>というイメージを打ち立てた。

ここで更に注意すべきなのは、「医学は、同時代のヨーロッパにおいて、すでに諸科学の総合というような相貌を呈し始めてい」て、蘭学というのは、決して医学だけではなく、西洋知そのもの・全体を指していたということである。しかも「当時、漢学と国学だけしかない日本の状況下では、医学よりむしろ、外の物事（たとえば社会、国家、あるいは世界）といったものを観察したり、分析したり、認識したりすることに役立った。という以上に、思考法そのものが書生たちにとって驚異であり、そのことが書生たちの大脳に重大な刺激を与えたことはまちがいない。」<sup>126)</sup>例えば、中国医学と西洋医学との対比を通じて、漢説は「多五行配当ニ拠リ、或ハ深く実物ニ徴セズシテ、専ラ憶想ノ穿鑿ニ過ル」と批判する一方、「彼邦[西洋]の俗、大率直質簡的を貴み、物に拠り事に徴して、実際に試みざれば、手を下し、又口に説くことを為さず」であるから、「実に就かざれば言はず、虚設・空論なくこと知るべし」<sup>127)</sup>とか、「東洋西洋の学説を比較」すれば、「彼れは陰陽五行の空を談じて万物を包羅し、此れは数理の実を計へて細大を解剖し…彼れは多言にして実証に乏しく、此れは有形の数を示して空をいふこと少し」<sup>128)</sup>と指摘されたように、日本の知識人は、科学的な態度を身につけて、幅広く西洋の近代知識を摂取することに努めた。同じく蘭医者緒方洪庵の門下で、医学者のほか、福沢諭吉のような経済学者・啓蒙家・文明批評家、橋本左内のような経綸家、村田蔵六（大村益次郎）のような民族主義的な兵法家が出たことは、非常に啓示的なことである。

江戸時代において許容された西洋の「知」がオランダ医学だけだったということ、また明治維新をブルジョア的革命たらしめるイデオロギーがすべて蘭学者を通して与えられたということを考えるならば、明治期の西洋医学派の権力獲得は、部分的であるどころか、最も象徴的なものである。他のいかなる領域においてよりも、近代医学は「知」の権力となったのである。<sup>129)</sup>

とあるように、漢方医の切捨て、蘭医の地位向上は、あくまでも中華思想の影響を無くし、西洋文明を導入するためのパラダイム・チェンジに過ぎなかった。

## 2.2 中国の場合

日清戦争の惨敗に強い刺激を受けた中国の知識人達は、日本の事、それから日本を介して西洋のことを理解した。その際、「心身一如」という中国固有の身体観が示したように、「修行」という問題が前提とされた中国の哲学的理論体系の基礎としての、「簡単にいえば、それは、真の知というものは単なる論理的思考によって得られるものではなく、自己の心身の全体をもって<体得>しく<体認>してゆくことによって得られるものだという考え方である」<sup>130)</sup> 身体観の指導の下で、人間の健康を維持する医学に強い関心を示し、「凡そ世界文明の極軌は、惟医学有り、它の学の有るなきなり…国を強くするには必ず先ず種を強くし、種を強くするには必ず先ず身を強くし、身を強くするには必ず先ず医を強くす…国の勃然、蓋し由有るなり。」<sup>131)</sup> 「天下を治めんと欲すれば、必ず自ら国を治むを始め、国を治めんと欲すれば、必ず自ら民を強くするを始め、民の強くせんと欲すれば、必ず自ら体を強くするを始む」<sup>132)</sup> と、医学問題を国家の生存と国力の強弱に直結し、国家の政治レベルに持ち上げた。「戊戌変法」の「学堂を新設し、中西の医理を考究する」方策に対して、梁啓超は、「医者、泰西大学に一科を為す。今特に之を増すを許すは、実に維新の一致たるなり」<sup>133)</sup> と高く評価し、極力推進した。その結果、「医学救国」(医学を持って国を救う)は時代の合言葉になった。

その後の「科学」・「民主」を二本柱にした五四運動以降、「真理の化身としての科学は、厳然とした新権威となり、普遍的且つ絶対的に性格」<sup>134)</sup> を持つようになり、中医はさらに酷評された。五四運動の指導者たる胡適は、東西文化の衝突・交流という時代背景に、1935年「わが国の陰陽五行に基づいた国医学を振り返ってみよう、科学的医学史においては、これは何の地位を占められるか？」<sup>135)</sup> と、「驕文、律詩、八股」等と並んで、中医を「非科学」的なもの・中国の立遅れの根源として、中国文化は西洋文明より二千年も立ち遅れた



と指摘した。このような時代機運の中で、「国家の生存を求め、民族の自救と自衛を図るために軍備の強化だけではなく、文化上必要な文物建設も必要になる。文物建設の中で、最重要なのは、科学的に新医学を建設することだ」<sup>136)</sup>と認識して、西洋医学を勉強するため留学する若者は多かった。日本一つ見ても、1911年前に名前が記録された学生だけで163人もいた<sup>137)</sup>。したがって、医学知識は五四運動によってもたされてきた科学知識の重要な一部分をなしていた。「翻訳書に依って日本の維新が西洋医学に端を發したこと」を知って、「卒業したら帰国し、父のような誤診された病人の苦しみを救い、戦争時軍医となり、一方には国人の維新に対する信仰を促進すべく」<sup>138)</sup>と信じて、医学へ強い関心を持った魯迅も、「医学というのは、近来頗る重要となり」、「薬箱を背負い、中国の農村を歩きめぐり、貧困人に医療を義務的に施すのは、どれほどよいことか」と憧れて、「もっぱら医学の勉強を志」<sup>139)</sup>して天津陸軍軍医学校に入学した郭沫若も、近代医学の勉強のために日本に渡ってきた。「医学救国」というのは、彼らに共通した理念であった。

その後、「中医廃存」をめぐる度重なった論争が起こり、殊に民国時代に入ってから、律法によって漢方医を根絶した日本に倣い、過激派の知識人は、文化の紛争を解決すべく立法に訴えた第一弾である「廢止旧医以掃除医事衛生之障碍案」（「医事衛生の障碍を一掃するための旧医廢止案」）の制定に動き出した。1934年、傅斯年は、「現在中国人にとって一番恥ずかしくて一番嫌うべきで、一番人ががっかりさせるのは、匪賊でもないし、外患でもない。所謂西洋医学と漢方医の論争である」と酷評し、中医を「中国人の劣根性」と認定し、匪賊と日本の侵略よりも酷いものとみなしていた「所謂国医問題」を書いた。ここで注意すべきなのは、1918年の「狂人日記」から1936年の「花辺文学・読書忌」まで、中医が殺人的ものだとずっと排撃した魯迅のことも見ても分かるように、字義通り、ずっと中国人の身体を守ってきて、「国医」とみなされてきた中医は、文学作品において立ち遅れた中華文明の象徴とみなされ、五四運動以降、ずっと攻撃されてしまったことである。

### 3. 実学思想の影響

日中両国の文学に対する近代医学の貢献度の違いは、両国の実学思想にも大きな関わりを持っていた。

儒学は、そもそも「経世」・「求实」という伝統精神を持っていたが、時代が発展するにつれて、中国において、価値を古代におき、秩序の中にあっては古さを貴び、若さを価値として殆ど容認しないという欠点を持つようになり、社会全体としての好奇心がないに等しくなった。固着してしまった儒学への反動として、中唐の韓愈や柳宗元らはそれまでの

経典解釈学的な儒学（漢唐訓詁学）を批判し、人間の道德性や天と人を貫く理を追究するようになった。それを源にした宋明時代の理学は、孟子の「内聖」という主張を極力実践し、「天理人欲」、「理一分殊」（程顥・程頤）、「性即理」（程顥・程頤、朱熹）、殊に明代中期以降になり、「心即理」（陸九淵、王守仁）即ち個人の心性の修養を重んじた結果、所謂「心性を空談す」理学末流に走り、空論に陥ってしまい、王朝衰退の一因ともなった。

もちろん、このような流れの中には、社会の発展に役立つ学問的主張もある。北宋理学の創始者の程頤は、「実学」という概念を提出し、老荘思想が持つ宇宙生命論、儒学が持つ世俗社会論と修養論、仏教が持つ宇宙生命と個別生命との関係論とを複合して成立させた、人間と自然とを貫く理を基礎にした朱子学もまた実学思想でもあった。思想内容から言えば、明清の実学思潮は、宋明理学に由来したものの、明代中期の理学末流の主張に明らかに違っている。こんな実学思想に影響され、時代を先駆けた一部の知識人は、理学末流から脱出して虚から実への史的転換をした結果、段々と実学を独立した学派と社会思潮の一つに発展させた。これはまた日本に伝わり、日本にも大きな影響を与えた。

では、どのような条件のもとで近代文学は成り立ち、また実学とはどう関わるのか。

それは…（小説の）言葉による表象の中に、近代国民国家が想像的なものとして立ちあがることである。またそれは、「文学」によって、近代国民国家を一つの統合体として表象しようという可能性を国家の側が発見し、その発見に内含されている期待（あるいは命令）に「文学」を創作する側が自発的に応えていこうとする、相補性といってもよいような関係が成立することにほかならない。<sup>140)</sup>

と指摘されたように、国家側と作家側との間にその「相補性といってもよいような関係が成立する」時こそ、近代文学が成立するのである。

以下では、この「相補性」を着眼点にして、両国の実学の具体的な発展と変化は考察せずに、両者の近代文学の発端に与えた影響だけを見ることにしよう。

### 3.1 近代文学の発足に対する日本の実学思想の影響

日本も中国儒学と実学思想に大いに影響されていたが、特別な国情と中華文明圏の辺境に位置するため、高級官僚登用試験としての中国の科举制度を導入しなかったことに象徴されたように、「それを読むというかたちでの儒教で…社会を成立させている基本思想として儒教が徳川日本に存在しな」<sup>141)</sup> かったため、儒学研究が硬直化しなかった。江戸時代になって朝鮮における朱子学研究の影響を受けながら、朱子学研究が盛んになったが、理を

中心とする思弁的な朱子学よりも実践を重視した儒学の古典と老荘思想の古典が日本人の肌にあったようで、同時にそれに対する研究も盛んであった。学問を志す者は自分自身の必要に基づいて、各地に開かれていた塾で師を選んで学問に励み、実学精神に基づいて実際の物事、現実を研究する傾向が強かった。このような中、それまでずっと手本と仰いできた中国がアヘン戦争で無残に負かされたことは、日本に大きなショックを与え、「福沢が日本に即しながら欧米の先端を取り入れた<実学><実業>論を提起し得た」原因は、「日本における<儒学>とくに<朱子学><宋学>における<実学>と、<蘭学>を窓口とする西洋実証科学とのクロスにある」<sup>142)</sup>との指摘通り、蘭学の禁が弛められて以来、儒学造詣の深い一部の知識人は、西洋の進んだ科学技術に魅了されて洋学者となり、実学的傾向を最も促進した。

彼らは、先ず「空」を批判し、「実」を重んじていた。

- 夫高遠ノ空理ヲ論ズル虚無寂滅如クハ五行性理或ハ良知良能ノ説ノ如キハ虚ガクナリ。之ヲ実物ニ徴シ実象ニ質シテ専確実ノ理ヲ説ク近今西洋ノ天文格物科学医学経済希哲学ノ如キハ実学ナリ。此実学国内一般ニ流行シテ各人道理ニ明達スルヲ真ノ文明界ト称スヘシ。(津田真道「開化ヲ進ル方法ヲ論ス」)
- ムベナル哉和漢ノ人ハ、初ヨリ字学ヲナセドモ、一生国字ヲ知尽サズ、ソノ外仏学・詩歌・茶・湯・謡曲・舞楽ヲ初メトシテ、無用ノ稽古芸術ニ日ヲ費シ…天下万国ノ大体ヲも知らず…。(蟠桃「地理第二」『夢之代』)
- 学問とは、唯むつかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽み、詩を作るなど、世上に実のなき文学を云ふにあらず…古来世間の儒者和学者などの申すやう、さまであがめ貴むべきものにあらず。(福沢諭吉「学問のすゝめ 初編」)

と、繰り返しになるが、中国の伝統文化と方法論は空理と排斥し、西洋の学問はこれに比して実理を説くものと認識し、時代をリードした。

では、日本の実学は、なぜ近代医学を皮切りにして発展してきたのか。先見てきたシンボル視という理由のほかに、日本の漢方医・本草学の事情も見なければならない。

明清の本草学が主に薬性理論に偏って多分に観念的な論究に走ったのに対して、日本本草は薬理よりは名物学・物産学・博物学的傾向が強く、薬物の学としての本草学の本道からいささか逸脱した面で実証的経験を蓄積した。この傾向は蘭学、西洋博物学の影響を受けて著しく加速され、江戸末期において近代自然科学への飛躍の展望を

も示した。<sup>143)</sup>

とあるように、中国の本草学との違いは、既に貝原益軒の『大和本草』から伺える。当時の実学主張も近代科学も先ず医学から始まったのは、ここに一理がある。ゆえに、当時の蘭学者の前身は主として医者であり、その研究対象は医学、本草学から天文学、暦学、兵学、また兵学の基礎としての物理、化学、数学に広がり、更に世界の情勢、各国の治乱興廢の跡を知ろうとするようになった。

次に、もっぱら社会に実用的な学問を貪欲に吸収・発展することである。

「心ある町人百姓は、其子の学問に出精するを見て、やがて身代を持ち崩すならんとて親心に心配する者あり。無理ならぬことなり。畢竟其学問の実に遠くして日用の間に合はぬ証拠なり。されば今斯る実なき学問は先づ次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」(福沢諭吉「学問のすゝめ 初編」)との指摘のように、明治維新の前後、全社会を制覇した実学主張は、民間ではもっぱら「人間普通日用に近き」もので、それに対して、経世済民を思想の中核にした武士の間では「広く天下国家のことを問題にする経綸の学であり、文学を否定する精神的態度の学問であり、思想である」。そこで、「幕末に実学を唱える人々の多くは、当時の俗文学たる劇作文学に関心をもたなかっただけでなく、彼らの教養の地盤である漢文学の研究に対しても、<訓話記誦>の学として排斥の態度をとったのである。実学がこのようなものであれば、それはおよそ文学というものに対して否定的な関係しかもち得ない」<sup>144)</sup>ゆえ、洋学者の仕事は、政治、経済、法律、哲学、文明批評等に重点をおき、彼等の文学上の仕事は、寥寥たるものに過ぎなかった。晩年の福沢が、慶応義塾が文学部を設置することに非常に立腹した原因もここにある。

文学に対して、武士から発展してきて「芸者」とみなされた洋学者だけではなく、明治政府も同じ指導思想である。「学制」の前文に当る「学事奨励に関する被抑出書」(明治5年)は、新時代の教育が、「国家よりも個人の立身のためのものであること(個人主義、功利主義)、国民だれでも教育を受けるべきこと(義務教育、国民皆学)とともに、教育・学問が「空理虚談」「詞章記誦」にわたるのではなく、あくまで日常の生活や現実的な仕事とか職業にとって役立つ有用なものであるべきこと、つまり「実学」(ということばはつかっていないが)でなければならぬとしている」<sup>145)</sup>と訴えている。このような社会情勢のもとで、一時、小説・戯作などはけしからんものだから、政府の力でこれをやめさせてしまおうというあまりに極端な議論が、維新早々の明治政府で交わされたことまでである。しかし、詩文の愛好者がまだ多くいた時代で、西洋でも小説などが非常に尊重されていたため、むしろ小説というものの力を利用していこうということで、明治5年明治政府は「三

条の教則」(敬神愛国, 天理人道, 皇上奉戴・朝旨遵守) という芸術政策・文芸政策を打ち出し、これに呼応して、戯作者側は「上申書」を献上した。これは、明治21年頃までずっと新しい戯作の勸善懲悪思想の土台をなしていた。このような条件のもとでは近代文学は成立できないのである。

しかし、一日も早く西方の強国と比肩できるため、明治政府は、西洋文明を受け入れ、これをもって自己教育・自己革新をしなければならないゆえ、その際「言葉による表象の中に、近代国民国家が想像的なものとして」作らなければならなかった。言文一致運動のお陰で、明治20年代、やっと所謂「国家・国民・国語・国文学」の「四位一体」という構図ができて、近代国民国家のために必要な小説の創作が必要になった。こんな状況のもとでできた近代文学は、ほかのジャンルに比して、その「ジャンルの生命線があらかじめ日本語の圏内では断ち切られた形で、準拠を新しい西欧の小説に求めながら、その模倣だけにたよらざるをえなかったのだ」<sup>146)</sup>との指摘通り、近代国民国家としての明治日本にとって、日本の近代小説は、もっとも「開化」したものであるという社会進化論的な価値付けを行ってしまった。「近代西洋の文芸意識が典型となった結果…十九世紀後葉の日本では、西洋ふうリアリズムこそ、小説が第一芸術ゆき特別列車に乗る座席指定券」となり、「文学と言えばすなわち小説であるかのごとき感じ」<sup>147)</sup>は、日本を西洋の強国に近づけさせる努力による文芸ジャンルの位相の変化の結果に過ぎない。この意味で、「経世済民の実践的意欲」を「学問の底」に持っていた洋学者の努力の結果、「近代文学誕生の妨害をなしていた社会的、思想的諸条件が破壊されていった。近代文学が生まれるための戦いは、文学に同情的でなかった人々によって非文学的な仕方になされたのである。ここに日本の近代文学の性格を考える場合の基本的問題がある」<sup>148)</sup>。

### 3.2 近代文学の発足に対する中国の実学思想の影響

中国が、維新直後文学を蔑視した日本と違ったのは、唐の韓愈等の提出した「文以明道」という思想をもとに宋の理学者によって発展してできた「文以載道」(文が儒家の思想<道>を載せて広げる) という文芸思想が、ずっと中国の文壇の底流をなして、「伝統的に、望ましい文学の姿勢、あるべき文学的発言は、政治の問題についても回避することなく、むしろ関与すべきであるとする傾向が強い。それに対して日本の文学世界では、『もののあわれ』の風情こそがたいせつで、文学に政治をからませるとやぼになるとする傾向が強い」<sup>149)</sup>とあるように、ずっと教化を旨としてきたからである。これは、実学隆盛の時代でも変わりはなかった。

中国実学の実際の発端と隆盛は、明朝中期からアヘン戦争までの三百年間とされている。

明末になると、王陽明の心学は、「理学末流」の学者によって「空言之弊」の極みに走り、儒を捨てて禅に入り、「空」「玄」を談じてばかりいて、国事には一向に構わなくなった。このような学界の気運の中で、「空談」或いは「訓詁章句の陋習」を軽蔑し、理学末流の束縛を打破して、「実を務め」「用を致す」ための「質測の学」に転向した結果、徐光啓、宋応星などの優れた実学的学者が出現し、科学の近代化の萌芽を促進した。が、全体的に言えば、濟世・救民を主旨とする中国の知識人達が堅持していたのは、「風声・雨声・読書声・声声入耳、家事・国事・天下事・事事關心」（種々の声を聞き学び、家事から国事に至るまで深い関心を持つ）という、東林書院にかかっていたこのあまりにも有名な対聯が示しているように、依然として「治国平天下」という政治的主張であった。東林学派の読書・講議・救国、言い換えれば学問研鑽と政治議論とを一体にしたやり方は、国家の安否を案ずる政治的態度の表れで、後世に大きな影響を与えた。それゆえ、東林学派は後に政治流派に発展し、「党錮」の罪に陥しいれられ、禁止されてしまった。これは、明らかにあくまでも技術の勉強に留まる幕府中期から明治維新初期までの日本の蘭学者・洋学者とは根本的に違うものである。したがって、明清時代に至っても、中国の文芸は依然として優れた成果を納めていた。例えば、明の時代、文学革新派の旗手である袁宏道は、李贄の「童心説」を踏まえ、「独り性靈を抒べて、格套に拘らず」（「序小修詩」）と訴え、「時代変われば、文もそれに従うべきである」（「与江進之」）と主張することを通して、現実に立脚し、理を軽んじて情を重んじ、新興市民階級の願望と要求を反映した作品を多く書き、文壇に大きな影響を与えた。五四運動前後、何百年も埋没していた李贄・袁宏道らの学説は再び重んじられ、「劇進派の第一人者」を自称した劉師培は、李贄の学説を大きく褒め称え、新文化運動の先鋒であった呉虞も『李卓吾別伝』を選した。五四運動後、周作人は更に明確に「もし胡適先生の主張から彼の受けた西洋の科学・哲学・文学及び思想など諸方面の影響を除けば、そこには公安派の思想と主張しか残らない。彼らの中国文学の移り変わりに関する見方は、現代の文学を談ずる人よりもっとはっきりしている」<sup>150</sup>と高く評価している。このような文芸思想があるからこそ、人口に膾炙した明清小説ができたし、清末の「詩界革命」、「小説界革命」がいち早く成功したのである。

中でも、「戊戌変法」が鎮圧され、政治的に失敗して無力を感じた啓蒙知識人達は、先ほど分析した中国の伝統的身体観・哲学の影響で、国家の生存・国力の強弱を身体へ結びつけることによって、恰も明治維新の成功に啓示を得たかのように、「医学救国」を呼びかけていた。伝統的には、「小説は、欧米における民の教化にも日本の俄な興起にも大いに寄与した」<sup>151</sup>と認識した清末の小説家達が、「小説界革命」を通して小説の創作ブームを巻き起こしたと思われてきたが、実は小説によって、「近代国民国家を一つの統合体として

表象しうるという可能性を」という国家の「発見に内含されている期待（あるいは命令）に」近代作家が気づき、国民国家建設のために、日本の国語・国文学の成果をモデルにして、「詩界革命」、「小説界革命」を巻き起こしたのである。その後、留学経験を通じてこの「相補性」を身をもって体験した「五四作家」達は、「愚弱な国民は、たとい体型がどんなに健全で、どんなに長生きしようとも、せいぜい無意味な見せしめの材料と、その見物人になるだけではないか…されば我々の最初になすべき任務は、彼らの精神を改造することにある。そして、精神の改造に役立つものといえば、当時の私の考えでは、むろん文芸が第一だった」<sup>152)</sup>とあるように、国民国家建設のために、身体よりむしろ精神のほうが重要であると認識して、一部の知識人、例えば医学専攻の魯迅と郭沫若等が相次いで文学創作即ち「文学救国」に転じたのは、極当然な成り行きである。中国最初の近代小説とされる「狂人日記」が示しているように、中国の近代文学には救国という特別な任務が賦与されたのである。そのような意味で、中国近代・現代文学は、その目的が社会の改造、国民精神の改造にあったと言っても過言ではない。

## おわりに

「(中医の) 運命はあたかも巨大の文化的鏡のように、中国文化と西洋文化、伝統と現代、民族主義的情緒と科学思潮、農耕文明と工業文明、都市化と田園情緒など、各要素の衝突と発展を映している」<sup>153)</sup>とあるように、西洋科学を導入するにあたって、パラダイム・チェンジを成し遂げるため、日中両国において、「国家の医学的意識」の元で、中医・漢方医が立ち遅れた中華思想のシンボルと見なされ、排撃されるとともに、西洋医学が西洋科学や思想のシンボルとして制度化され、かつて「小術」と思われていた医学は国運に関わる重大な事業として格上げされた。しかし、伝統思想も違い、国の事情も違ったため、日本の場合蘭医をはじめとする近代医学の導入は、啓蒙・開化の役目を果たしたが、実学に留まり、近代文学発生のための下地を築いただけであったのに対して、中国の場合「文以載道」という伝統的文芸思想と「身心一如」という伝統的身体観の影響で、知識人達は、国家と国民の健康とを結び付けて考え、清末頃「医学救国」運動を起こして、更に五四運動後、国民国家建設における近代小説の重要性を体験し、身体より精神のほうが重要であると認識して、「文学救国」へと発展し、中国近代文学を発足させ、しかもそれに大きな影響を与えたのである。

## 注：

- [1] 源了圓「明治維新前後の実学思想と近代文学の発生」(『文学』VOL27 1959. 8) p17
- [2] 杉田玄白「形影夜話」(『日本思想大系 64. 洋学 上』岩波書店 1976) p250
- [3] 司馬遼太郎著『胡蝶の夢』(新潮社 1997) p61, 125
- [4] 杉田玄白著, 緒方富雄校注『蘭学事始』(岩波クラシックス 1983) p42-43
- [5] 前掲注[4] p53-54
- [6] 前掲注[1] p13
- [7] 福沢諭吉『福翁自伝』(岩波文庫 1978) p93
- [8] 欧陽修, 宋祁『新唐書』卷二百四十(中華書局 1975) p5797
- [9] 李梴『医学入門』(天津科学技術出版社 1999) p20
- [10] 趙尔巽等『清史稿』(中華書局 1977) p10313
- [11] 吳汝倫『李文忠公(鴻章)全集・奏稿』(台北文海出版社, 1980年影印本) p2261
- [12] 金沢一郎「西洋医学と東洋医学の統合」(『日東医誌』VOL59No6 2008) p765
- [13] ミッシェル・フーコー著, 神谷美恵子訳『臨床医学の誕生』(みすず書房 1969) p14, 72
- [14] 熊月之『西学東漸与晚清社会』(上海人民出版社 1994) p710
- [15] 前掲注[4] p47
- [16] 杉田玄白「狂医之言」(『日本思想大系 64. 洋学 上』岩波書店 1976) p231
- [17] 前掲注[16] P229, 230
- [18] 大槻玄沢「蘭学階梯」(『日本思想大系 64. 洋学 上』岩波書店 1976) p339
- [19] 前掲注[16] P229, 230
- [20] 司馬江漢「和蘭天説」(『日本思想大系 64. 洋学 上』岩波書店 1976) p449
- [21] 前野良沢「管蠡秘言」(『日本思想大系 64. 洋学 上』岩波書店 1976) p147
- [22] 前掲注[16] P228 - 229
- [23] 前掲注[16] P229, 230
- [24] 前掲注[2] P278, 281
- [25] 朱謙之『日本哲学史』(三聯書店 1964) p1082
- [26] 前掲注[3] p130, 131
- [27] 高野長英著, 佐藤昌介校注『崑山・長英論集』(岩波書店 1978) p187, 154, 164
- [28] 福沢諭吉「福翁百話 三四」(『福沢諭吉全集』第六卷 岩波書店 1970) p261
- [29] 柄谷行人『定本 柄谷行人集 I』(岩波書店 2004) p152
- [30] 湯浅泰雄『身体』(創文社 昭52) p16
- [31] 梁啓超「医学善会序」(『時務報』光緒 23 < 1897 > 年 8 月 8 日)
- [32] 康广仁「富强始于衛生論」(『知新報』1897年11月11日)
- [33] 中国史学会『中国近代史資料叢刊 第二册 戊戌变法』(上海人民出版社 1961) p80
- [34] 王元昆「浅述中西医基本哲学思想与中西医结合」(『医学与社会』1998.11) p5
- [35] 胡適「人和医学」(『胡適之先生年譜长編初稿四』(胡頌編 聯經出版事業公司 1990) p1430
- [36] 黄子方「中国衛生刍议・弁言」(中央防疫处翻譯科 1917) p4
- [37] 実際にはもっと多くいたと推測されている。詳しくは牛亞華「清末留日学生及其对中国近代医学事業的貢獻」(『中国科学史』2003年第3期)を参照。
- [38] 魯迅「呐喊・自序」(『魯迅全集』第1卷 人民文学出版社 2005)
- [39] 唐明中, 黄高斌『桜花書簡』(四川人民出版社 1981) p43
- [40] 小森陽一『小説と批評』(世織書房 1999) p28
- [41] 前掲注[3] p60



- [42] 笹川孝一「福沢諭吉の著作活動における『学問のすすめ』の位置について」(『法政大学キャリアデザイン学部紀要』 2005. 3) p100
- [43] 遠藤正治「日本の本草学の展開」(源了圓, 末中哲夫編『日中実学史研究』 思文閣出版 1991) p111
- [44] 前掲注 [1] P1
- [45] 石附実「実学としての教育」(源了圓, 末中哲夫編『日中実学史研究』 思文閣出版 1991) p175
- [46] 前掲注 [40] p22
- [47] 小西甚一『日本文学史・V』(講談社 1993) p322 - 323
- [48] 前掲注 [1] P5
- [49] 鈴木修次『中国文学と日本文学』(東京書籍 昭53) p18
- [50] 周作人『中国新文学の源流』(江蘇文芸出版社 2007) p22
- [51] 商務印書館主人「本館編印繡像小説縁起」(『繡像小説』 第1期 1903)
- [52] 前掲注 [38] に同じ
- [53] 王一方, 邱鴻鐘「百年中医甄变」(『医学与哲学』 第20卷第3期 1999) p47

\* 本稿は、中国教育部人文社会科学研究企画基金プロジェクト「思想と社会転換期文学変遷考」(11YJAZH05)とそれを発展的に引き継ぐ中国広東省人文社会科学研究プロジェクト「中日『あはれ』の文学比較研究」(11ZGXM750010)の助成を得ている。